府の改良主義と恩惠的施設とに、過大な希望を抱かしめることに努め、或は國際聯盟の配當獲得や資本家の協調機關の暗中飛躍により、一部の勞働者とその指導者との調和懷柔に努めてゐる。

以上二つの形勢は、近時一部の勞働組合指導者の間に勃興したところの、現實主義の假面を被ぶつた改良主義と勞資協調主義との、輕薄的、社會的根底をなすものである。

斯くの如く、一部組合指導者の現實主義なるものは、階級鬪爭の立場を棄てゝ、資本家階級及び政府と協力しその報酬として、資本主義の利益の分け前に與らうとする一種の取引に過ぎぬ。然るにこの希望は、我國資本主義の現實を理解せぬために起つた空想である。

抑も、資本主義の發達期にあつては、資本主義經濟の繁榮は、勢ひ勞働賃銀を引上げ、勞働條件改善の餘裕を作るものであつて、勞働階級は、資本主義の擁護と繁榮とに協力することによつて、生活の向上を豫期することが出來た。この事實こそ階級協調主義と改良主義との經濟的根據であつた。然るに今日は事情が一變し、衰亡の道を辿つてゐる末期の資本主義には、最早斯くの如き餘力はない。從つて、勞働階級が資本家階級と妥協し、協力することによつて、何物かの恩惠を望むのは資本主義の現狀を見ない盲目者の、はかなき幻影に外ならぬ。

斯くの如く、行詰つた現在の資本主義には、協調主義と改良主義とによつて、勞働者の生活を向上せしめることの出來る經濟上の根據がない。若し勞働階級の運動が、この幻影によつて指導せられたなら、その到着點は、

資本の搾取からの解放ではなくて、資本に對する完全な隷屬である。そして、吾々の生活は、愈々益々低下せざるを得ないのである。

斯やうな、資本主義の現實に立脚することを知らず、之に對する勞働階級の現實の必要に立脚することを知らぬ、空想的指導者等は、現在の形勢の下に於いては、たゞ鬪爭によつてのみ、勞働條件の改善と、生活の向上とを獲得するの他、斷じて道のないことを悟らない。組合運動が在來の力に滿足せず、在來の少數專制的分子の運動たることに滿足しないで、幾多の危險を冒しても、大衆的運動に方向を轉換しなければならぬのは、要するにこの鬪爭の力を增し、この鬪爭を有効にする爲である。從總同盟の十三年度大會宣言の精神は、實にこゝに存してゐる。そしてこの宣言が、日本の組合運動の上に、劃時代的意義を有する所以も亦こゝにある。

然るに是等の空想的指導者等は、敵の勢力の增大を見て、直に階級鬪爭の戰線を放棄して、階級協調に方向を轉換せんとするものである。彼等もまた現實に立脚する必要を唱へてゐる。然しながら彼等の現實立脚とは、改良主義の存在の餘地無き資本主義の現實と、この末期の反動的資本主義の羈絆に壓躙せられてゐる勞働大衆の現實の要求とに、立脚して戰ふことではなくて、彼等の組合官僚的勢力の現狀に立脚して、資本家官僚と取引をすることを意味してゐる。

之に反して、日本の組合運動は、過去の鬪爭と、幾多の同僚の貴い犧牲とによつて、勞働階級の間に、明確な